

『カンタベリ物語』における 「教区司祭の話」にあらわれる五感と構造的意味

狩野晃一

本発表では、チョーサー『カンタベリ物語』の末尾に置かれる「教区司祭の話」を対象とし、同話における五感表象が作品全体の終結構造においていかなる意味を担うのかを考察した。「教区司祭の話」は、韻文による多様な物語群の後に置かれた、悔悛を主題とする散文的な司牧テキストであり、痛悔、告解、償罪という三部構成を基本とし、七つの大罪とそれに対置される徳を体系的に扱う長大な散文テキストである。それがゆえに、しばしば読者にとって近づきにくい「話」でもある。しかし本発表では、この「近づきにくさ」を『カンタベリ物語』の終わり方そのものを理解するための重要な契機として捉え直した。とりわけ、世俗的な物語コンテストの快楽が、最後に司牧的・悔悛的言説へと転換される過程に注目し、その転換が五感を通じて読者／聴衆に作用する様相を明らかにすることを目的の一つとした。また、「教区司祭の話」をヴァナキュラーな悔悛マニュアルのジャンルに位置づけ、その結末機能と文学性を検討している Newhauser (2016) の論を援用し、特に多感覚性 (multisensoriality) が作品末尾においてどのような構造的意味を持つかを検討した。

発表の出発点として、「法学院賄い方の話」の後に続く「教区司祭の序」における時間描写を確認した。同箇所では、太陽の高度、影の長さ、午後四時という時刻が具体的に示され、読者は物語的虚構の世界から、夕暮れの現実的時間へと引き戻される。この時間設定は、巡礼の往路の終わりを示すだけでなく、人生の終盤、さらには死の接近をも想起させる。続いて教区司祭は、宿屋の主人が求める作り話・物語 (fable) を拒否し、散文によって「天上のエルサレム」へ向かう完全な巡礼の道を示すと宣言する。ここで語りの目的は、娯楽としての物語から、魂の救済へ向けた霊的教導へと明確に切り替えられる。

まず、中世哲学・神学における五感理解を整理した。アリストテレスの認識論において、感覚は知性に先立つ認識の基礎であり、想像力も感覚なしには成立しないと考えられていた。したがって視覚・聴覚・嗅覚・味覚・触覚という五感とは、単なる外界を知るための身体的機能ではなく、知の成立に不可欠な入口であり、誘惑や欲望が魂に入り込む門として捉えられる。この二面性のゆえに、五感とは悔悛、説教、徳目教育の中心的な問題として扱われることになる。

さらに、中世の罪と罰の理解においては、地上での感覚的快楽が来世における感覚的苦痛へと反転するという論理が見られる。すなわち、地上で五感を通じて享受された快楽は、地獄において同じ感覚器官を通じた罰として返される。この意味で地獄とは、五感の快楽の回路が罰の回路へと反転される場所である。悔悛とは、単に罪ある行為を列挙し反省するだけでなく、どの感覚がどのように欲望を常態化させたのかを確認し、感覚を再教育する過程でもある。

この枠組みに基づき、「教区司祭の話」における地獄描写を分析した。中心となる一節では、地獄的苦痛が五感の列挙によって構造化されている。視覚は「暗闇と煙」に満たされ、涙を生む。聴覚は「嘆き」と「歯ぎしり」に満たされる。嗅覚は悪臭によって侵され、味覚は「苦い胆汁」に置き換えられる。そして触覚は「決して消えない火」と「決して死なない虫」に覆われる。このように、地獄は抽象的な恐怖としてではなく、身体各感覚に直接訴える経験として表象されている。この多感覚的地獄描写の意義は、地上の感覚的快楽を来世の感覚的苦痛へと反転させる点にある。華美や情欲的眼差しに傾いた視覚は暗黒へ、快い音や誹謗の快楽に関わる聴覚は不協和の騒音へ、芳香や美食の記憶に結びつく嗅覚・味覚は悪臭と苦味へ、身体的快適さや不適切な接触に向かう触覚は火と虫による侵害へと転化される。したがって、地獄描写は、来世の苦痛を説明するためだけのものではなく、五感を通じて読者／聴衆に罪の帰結を実感させ、悔悛の必要性を認識させる機能を担っている。

また、語彙反復にも注目した。たとえば *stynkyng*、*roten*、*corrupt*、*bitter*、*bitternesse*、*the peynes of hell* など、感覚的苦痛に関わる語彙が「教区司祭の話」には集中して現れることが確認された。こうした反復は、地獄の永遠性を論理的に補強するだけでなく、読者に体感させる働きを持つ。すなわち、言語の反復そのものが、逃れられない苦痛の反復を模倣し、聴衆の感覚に直接影響することを期待している。

後半では、この五感表象が『カンタベリ物語』全体の終結構造において果たす役割を検討した。第一に、「教区司祭の話」は、物語世界の終わりとして作品としての終わりを重ね合わせる。巡礼者たちはカンタベリーへ近づき、旅は終局へ向かうが、同時に作品は「教区司祭の話」とそれに続く「取り消し文」によって、物

語内の終結と、作品全体を閉じる構造的な終結が重ね合わされている。第二に、午後四時、夕暮れ、太陽の下降という時間意識は、死の接近を暗示し、これまでの物語的快樂に猶予が残されていないことを示す。語ることは一時的な逃避でありえたが、教区司祭の語りはその逃避を断ち切る。第三に、教区司祭は巡礼の意味を再定義する。宿屋の主人が求める「実りある話」は、物語コンテストにおける機知や娯楽と結びついていた。しかし教区司祭はその要求を受け止めつつ、真の巡礼を「天上のエルサレム」へ向かう靈の旅として再構成する。その結果、世俗的な巡礼の枠組みは、魂の行程として読み替えられる。第四に、「取り消し文」はこの転換を作品全体へと拡張する。「取り消し文」はしばしば作者による全面的撤回と理解されてきたが、近年の研究では、そのような単純な世俗的著作活動の否認が問い直されている。本発表でも「取り消し文」を単なる否認ではなく、作品全体の読みを倫理的枠組みへと置き直す締めくくりの役割として捉えた。この意味で、「教区司祭の話」と「取り消し文」は異なるレベルで同じ方向を向いていると言えるだろう。前者は内容のレベルで、五感の快樂を五感の苦痛へと反転させる。後者は形式のレベルで、物語の快樂を宗教的・倫理的評価という観点から見直させる働きがあり、それらは双方向に作用している。『カンタベリー物語』は、フィクションの豊かさを十分に展開した後、その最終局面においてフィクションの快樂を宗教的省察へと差し戻すのである。

以上の考察から、本発表では、チョーサーが「教区司祭の話」において単に物語を否定したのではなく、五感を媒介として読者を「フィクションという安全な距離」から引き戻し、死・審判・悔悛という切迫した現実に直面させたと結論づけた。地獄の多感覚的描写は、超越的な来世を現在形の身体経験として提示し、物語を享受する主体を、現実を身体で引き受ける主体へと変える。この転換によって、巡礼は単なる到着ではなく、靈的な意味で完成される。同時に、「教区司祭の話」の過剰な嚴肅さは一義的ではない。それは宗教的教えとして真摯である一方、物語競争という遊戯的枠組みに対するアンチ・クライマックスとしても機能しうる。また、その嚴肅さは世俗的快樂、虚栄、制度的腐敗を五感に訴える言葉を積極的に用いるため、一方で風刺的効果も帯びる。その意味でチョーサーは、結末でフィクションを単純に否認するのではなく、むしろ極端な嚴肅さによって、宗教的な導きと文学的批評性を同時に成立させている。最後の *fable* 拒否は、物語（と愉しみ）そのものを奪うのではなく、読者が物語に対して持っていた世俗的な安易な距離を奪う行為である。同時に、『カンタベリー物語』の巡礼は終点へ到達するだけでなく、構造的に完成すると考えられる。

このように物語の結末について多面的に見ることで、「教区司祭の話」を単なる付加的・説教的結末としてではなく、『カンタベリー物語』全体の構造を支える決定的な終端部として再評価することができるのではないだろうか。